クシャーナ貨幣のシヴァ神像は果たしてシヴァか

山　田　明　爾

西北インドを支配した異民族諸王の貨幣にあらわれるインド起源の神像は比較的すくなく，銘文にそれと示しているものには，Kanishka 貨幣の数例の仏像しかない[1]。そのほかに銘文から推定されるものとしては，Śiva, Skanda-Kumāra, Umā, Mahāsena, Vishākha などが挙げられている[2]。ここで論ずる問題は，一般にシヴァ神とみとめられている像が，果たしてシヴァ神像であるか，との疑問であり，さらにはヒンドゥーにおけるシヴァなる神格の成立過程の再検討の提唱である。

問題の像は，はじめ Vima Kadphises の貨幣にあらわれる。従来の比定によれば，このシヴァタイプは三種に大別される。

A）一面二臂，右手に三叉戟，左手に動物の生皮をもつ単独像，聖紐を肩にかける全裸，カローシュテイ銘 “maharajasa rajadirajasa sarvaloga iśvarasa *mahiśvarasa vima kaṭhphisasa* tradarasa”.

B）像・銘ともにAタイプに同じ。下衣をつけ，背後にこぶ牛像をもつ。

C）神（人物）像はなく，三叉戟が中央の台上に飾られている。カローシュテイ銘 “maharaja rajadiraja *vima kapiśasa*”.

上記三タイプをシヴァと比定することにうたがいをもった例をしらない。比定の根拠は，第一に，銘文中の “mahiśvara”（Skt. maheśvara）なる名が，現在数多くあるシヴァの異名のひとつであること，第二に，その手に持つ三叉戟が現在のシヴァの図像上の属性のひとつであること，第三に，Bタイプのこぶ牛が Nandin 牛と推定しうること，その他，後代にみられるシヴァ神像に似た，裸形かそれに近い形であること，などである。

Kanishka 貨幣のシヴァ神像は，Vima A タイプ類似の単独像であるが，背後の牛はない。一般に Kanishka 貨幣にカローシュテイ銘が用いられることなく，このシヴァ

付表　クシャーナ・Mahiśvara-OESHO タイプ貨幣

	タイプ	面	臂	OESHO 銘	mahiśvara 銘	こぶ牛	三叉戟	動物の生皮	太鼓（ヴァジュラ）	水つぼ	角のある獣	人の首（ひょうたん）	車輪	棍棒	王冠（ひも）	蓮華
Vima Kadphises	A	1	2	○			○	○								
	B	1	2	○		○	○	○								
	C						⊙									
Kanishka	A	1	4		○		○		○	○	○					
	B	1	2		○		○					○				
Huvishka	A	1	4		○		○		○	○	○					
	B	1	2		○		○					○				
	C	3	4		○		○		○		○		○			
	D	3	4		○		○		○	○				○		
Vāsudeva	A	3	4		○	○	○								○	○
	B	3	2		○	○	○								○	
	C	3	2		○	○	○									
	D	1	2		○	○	○								○	

・タイプでも銘はギリシャ文字 “OESHO”[3] とある。

A）四臂像。太鼓かヴァジュラ（金剛杵）か不明のもの，水つぼ，三叉戟，角のある動物，の四つを四本の手にもつ。

B）二臂像。ひょうたんか人の生首か不明のもの，および三叉戟をもつ。

Huvishka 貨幣には四タイプがあり，いずれもギリシャ文字 “OESHO” 銘をもつ。

A）Kanishka A タイプに同じ。

B）Kanishka B タイプに同じ。

C）三面四臂像。車輪，角のある動物，三叉戟，太鼓（またはヴァジュラ）をもつ。

D）三面四臂像。太鼓（ヴァジュラ？），水つぼ，三叉戟，棍棒をもつ。

ここでも Kanishka 貨幣同様，こぶ牛はあらわれてこない。

Vāsudeva の “OESHO” 銘貨幣は次の四種に分けられる。

A）三面四臂。結髪をして肩に炎をもつ。王冠（？）[4]，蓮華，三叉戟，水つぼを手にもつ。背後にこぶ牛がいる。

B）三面二臂像。王冠（？）と三叉戟をもつ。背後にこぶ牛がいる。

C）Bタイプに同じ。ただ背後の牛が顔を正面に向けている点が異なる[5]。

D）一面二臂。他はBタイプに同じ。

以上がシヴァに比定される貨幣像であるが，この他にシヴァとされるものがない訳ではない。たとえばサカ王 Maues (c. B. C. 一世紀前半) の貨幣の棍棒，三叉戟または水つぼをもつ像がクシャーナの OESHO 像のプロトタイプと言われ[6]，またパフラヴァ王 Gondophares (c. A. D. 一世紀前半) の貨幣に，表に騎馬の王を表し，裏にインドのシヴァ神を描いたタイプがある[7] といわれている。しかし，これら両王の貨幣の像はシヴァらしくない。Gondophares の貨幣については，Gardner もインド神のうち最初に貨幣にあらわれるのは，Gondophares 貨幣のシヴァだといっているが，シヴァ的特徴がはっきりしないので，ギリシャ海神ポセイドンかもしれない，と消極的にしか比定していない。またシヴァ以外では，Azes 貨幣の蓮華上に花をもって立つ女神を，パールヴァティーかラクシュミーに比定するが，検討の要がある。

さて，大体以上の貨幣の神像がシヴァに比定されているもので，この比定は従来すべての学者に承認された定説になっている。事実，後代のヒンドゥーの図像から見ると，この比定に疑義はない。しかし，ヒンドゥーの神々の図像的特徴が今日の型をとるにいたるまでの変遷を考えに入れると，ここに大きな問題が起こってくる。

インド・アーリヤンが古くは像崇拝をしなかったことは広く知られている[6]。仏像出現以前の神像の遺例はすくなく，サンチー，バールフート等の仏教彫刻に見られる守門神（ヤクシャ，ヤクシー）を除くと，マウルヤ，シュンガを通じても僅か数点しか知られていない。最も古くは，マウルヤ期とされている有名なディーダルガンジ出土のヤクシー像があり，その他の古代期単独像はすべてヤクシャ，ヤクシーであり，ヴェーダやヒンドゥーの重要な神々が，像にされた形跡はない。さらに，仏教美術の守門神等もすべて銘文から推して，ヤクシャ，ヤクシーまたはナーガ，ナーギーに比定されている。これらの，仏像出現にさきだつインドの単独神像については，すでに考究されており[7]，そこに論ぜられるところによれば，この上記の四神は元来アーリヤ起源ではなく，それ以前からの土着の神々であったという。この点は，そののちこれら四神が各宗教の中で得た地位から見てもうなずける。土俗神であるために土着の信仰は根強く，ためにヒンドゥー，仏教，ジャイナ教等に早くからとり入れられたが，土俗神であるために高い地位は獲得しえず，又各宗教の中で自由にその神格をかえられ；ついにはおどろくほど多様な神格をもったマイナー神になっているのである。したがってこれら四神が，礼拝の

対象でありうる単独像の型であらわされる例は，紀元前の古いものでしかない。

上記以外の宗教的な単独神像としては，モヘンジョダロにはじまるテラコッタに，土俗神と思われる小像が多く存するが，アーリヤ的神像の例はまったくない。インド美術に最初にあらわれる，明らかに礼拝対象である像は，西紀一・二世紀のガンダーラにあらわれる仏・菩薩像なのである。

仏像の出現はいずれにせよ，インドにおける神像の概念を大きくリードしたものである。この仏像の影響によって，やがてジャイナやヒンドゥーの諸神の造像がはじまるものと見て大過はあるまい。知られているヒンドゥー神像で，仏像出現に先行する彫像はなく，それをシヴァ神に限ったところで，グプタ期にかかるものが最古とされている[8]。

以上のようなヒンドゥーの初期的な神像の概念を考えあわせると，Vima Kadphises 貨幣に「明らかに」シヴァ神像を表していると果たして言いうるかに疑問が起こってくる。

サカ，パフラヴァ，クシャーナの年代論は，周知のごとくインド・中央アジア史最大の論争点になっていて，決定的な結論を得るにいたっていない。が，すべての議論を考えあわせ，大きく幅をもたせたところで，Vima の年代は西紀一世紀中葉から二世紀の初三十年までのある時期であったことは疑いをいれない。絶対年代の設定は困難としても，Vima と Kanishka の間に大きな隔たりがあることはあるまい。

詳説ははぶくが，班勇の記録をもとにした後漢書西域伝に Kanishka についての言及がないことから，A. D. 125 年までは Kadphises 王朝が続いたとみられる。また Vima の年代については，紀年をもつ次の碑文が手がかりとなる。

(1) タフティバーイ碑文「大王 Guduvhara……103年……」

(2) パンジタール碑文「紀元122年……大王 Gushaṇa 王……」

(3) カーラワーン碑文「Aja の紀元134年……この Kshuṇa によって……」

(4) タキシラ碑文「Aya の紀元136年，大王・諸王の王，天子たる Khushaṇa の…」

(5) カラツェ碑文「紀元187年，大王 Uvima Ka〔vṭhi〕sa の……」[9]

上記(3)と(4)が「Aja の紀元」「Aya の紀元」といっているものは，「Azes の紀元」すなわちサカ王 Azes が西インドからとりいれた，B. C. 57—8 年を初年とするヴィクラマ紀元を指す。(2)〜(4) Gushaṇa, Kshuṇa, Khushaṇa はいずれもクシャーナ（Kushāṇa）を言い，(5)の Uvima Kavṭhisa は Vima Kadphises を指す。以上の五点がいずれもヴィクラマ紀元にもとづくとすれば，

(1) A. D. 45年頃は，パフラヴァ王 Gondophares は健在，したがってクシャーナは

西北インドにまだ侵入していない。

(2)(3)(4) A. D. 64年，78年，80年，タキシラまでクシャーナ支配がおこなわれたことを示すが，夫々の碑文のクシャーナ王が Kujula か Vima かはわからない。

(5) A. D. 129年には Vima がまだ健在である[10]。

Vima と Kanishka の間には，遺品の様式の相違からいって，文化的な断絶がみとめられるし，年代的に直接つながっているかどうかもよくわからない。しかし，仮に年代にギャップがあったとしても，10年以上ということはあるまい。

以上のことから，Kadphises の二人の王の西北インド支配は c. A. D. 60～130 の約70年間で，その後半の何年かが Vima の治世，A. D. 130年以後150年ごろまでのある時期から Kanishka 治世がはじまったと言うことはできよう。そして，ガンダーラにおける仏像の制作がはじまったのもこの時期にかさなるらしい。しかしこの Kadphises 王朝が直接仏教の保護をした形跡はない。

仏像の出現は仏教史上画期的な事件である。単に美術のみならず，仏教の教理・思想にも大きな飛躍をもたらしている。また混沌にみたされる西北インド史の解明にとっての一つの鍵でもある。当然論ぜらるべき点は多いが，ここでは本論にかかわる一つのポイントの指摘にとどめよう。

知られるように，ガンダーラで仏像が制作されるまでのインド仏教美術は，無仏像の態度をまもりつづけた。これは，ひとつには仏陀の偉大さは図像になど表現さるべき限界を超えるものである，との仏教徒自身の観念が強く規制しつづけた結果である。が，他方，インドにおける神像崇拝の観念の不在にも起因しているといえよう。クシャーナ期以前，インド各地にさかえた各派仏教美術の遺品に見られる無仏像の作例には，可視的に表現さるべからざる仏陀に対する深い敬意，と言うよりはむしろ，不自然なまでに強い仏像制作への忌避がみとめられる。無仏像の仏伝図，または礼拝図の場合など，単に仏陀が像としては存在せず，かわりに菩提樹，仏足跡，冠，ストゥーパなどが置かれていると言うだけで，その図柄の構成は，仏像の出現を即座にうけいれるだけの潜在的な準備がまったく整っていることを示している。にもかかわらず，実際には A. D. 一世紀後半のガンダーラまで仏像は出現しなかった。と言うことは，ほとんど仏像うけ入れの準備態勢が完了していたとは言え，仏像制作には踏みきりえなかった仏教徒をして，あえてその禁忌を破り仏像制作を開始せしめるだけの，従来になかった異質な発想なり異質な宗教理念なりが，A.D. 一世紀後半のガンダーラにあったということである。仮

にマウルヤ・シュンガ期の数点のヤクシャ，ヤクシー単独像の遺例が，言われるように礼拝対象の神像であったところで，これらの神像の系統から造像の理念をうけついで仏像の出現が果たされたとは考えられない。すわなち，これらの初期的神像は，インド神像史のなかでは孤立した存在になっているのである。ここでこれら神像が非アーリヤ起源の神格であることを想起せねばなるまい。これらの西紀前の神像が礼拝像であるとしても，それは仏像出現以前のインドに礼拝像が存在したことを証するよりは，土俗信仰として存在したかも知れない神像崇拝は，アールヤンの宗教にひきつがれることはなく，かえって神像不在のアールヤ的宗教観に呑みこまれてしまったことを示していると理解すべきである。

最初の仏像は貨幣像ではなく，彫像である。仏像をもつ貨幣は Kanishka に限られ，一方 Kanishka 以前に仏の彫像はすでに定着していた。ガンダーラに始まる仏造像の理念をうけたマトゥラーの仏像に Kanishka 2年，3年，4年等の紀年銘をもつ，仏または仏型の「菩薩」銘をもつ像があることから，このことは充分うかがい知れる[11]。なお，ガンダーラの作例には紀年銘がすくなく，しかも紀年をもつものはいずれもガンダーラ後期に属し，今の場合参考にならない[12]。仏の彫像が貨幣像に先行することは，仏像が主に仏教者の要請によるに対し，貨幣像は統治者（発行者）によって一つの神格がえらび出される，というあり方からも知られよう。神格も像容もある程度定着したものでなくては，貨幣の神像としてえらび出されにくいであろう。

ここで問題を上述の Vima 貨幣のシヴァ像にもどそう。この貨幣像がシヴァ像としてもインド神像としても，他とまったく孤立したものであることはいなめない。インド的神々の像が，ヤクシャ，ナーガ等以外にはまったく存在しない時代にあって，仏像よりも先に貨幣にあらわれ，しかも貨幣以外にはそれにつながる作例が前にも後にもないのはいかにも奇妙である。しかし，貨幣上ではこの神（仮に mahiśvara 神と呼ぼう）の像が仏像より前に現れていても，それは仏像の出現が mahiśvara 神像の出現よりもおくれることを意味するとは限らず，ただ Vima はこの mahiśvara 神信仰には特別に関心をもったが，仏には貨幣像のモデルに選び出すほどの関心をもたなかったにすぎない。

ところで mahiśvara 神は果たしてシヴァであろうか。シヴァ神の性格には，今日の概念においても相矛盾するものが多く，他のヒンドゥー神と比べて曖昧な点がある。多くそれはシヴァ神の起源に起因しているようである。その最古の起源は，一般にはヴェー

ダに出るルドラ神とされているが，さらにはモヘンジョダロー出土のシールにシヴァが見えるともされる。ヴェーダのルドラは暴逆の神であり，ヴェーダ諸神のなかで高い地位をもつものではなく，その地位が高まるのは，古ウパニシャッドの第二期，およそ西紀前五世紀頃のことである。

Vima 貨幣の像をシヴァに比定する第一の根拠は，“mahiśvara” なる銘である。この語の梵語型 maheśvara は，今日シヴァの数多くの異名のひとつとされてはいるが，実はシヴァ固有の名ではなく，インドラ，クリシュナ等をはじめ，他の神々の異名としても用いられるのである。しかもこの銘文 “Sarvaloga iśvarasa mahiśvarasa”（全世界の主宰者にして，大主宰者たる）では，この語は所有格であらわされ，Uvima kavthisa (Vima Kadphises) の名を修飾していて，神像の名ととることはできない。Vima 以前の貨幣で，裏面にカローシュティー文字と神像とをあわせもつ例はあるが，その銘が神像の名である例が皆無であることからも，mahiśvara をこの神像の名とはとりにくい。仮に一歩をゆずり，Vima がこの神を意識したためその神の名を自分の称号にもちいたとしたところで，mahiśvara がシヴァであるとの積極的根拠はなく，この神像が mahiśvara 神であるにとどまる。

次に三叉戟 (triśula) であるが，これとてもシヴァのみに固有の属性ではない。ガンダーラの比較的初期のハリティー像に同様のものをもつ例があり[13]，Whitehead の言う Gondophares のシヴァ・タイプ貨幣もこれをもつ[14]。このシヴァ・タイプの銘文は “maharajasa rajarajasa tratarasa devaputrasa Gudupharasa” であり，シヴァにつながる何ものもない。その他 Antimakos (c. B. C. 190) 貨幣のポセイドン像[15]，Maues 貨幣のポセイドン像[16]，Azes 貨幣のポセイドン像[17]，Demetrios 王像[18]，Maues 王像[19]，OOHMO KAΔΦICHC 銘をもつ王像[20]，Vasudeva 王像のすべてなど，例は非常に多い。これらから見ると，三叉戟はシヴァの特性であるよりは Indo-Greeks 貨幣ではむしろポセイドンの属性としての性格が強く，クシャーナになるとそれは王権の威勢のシンボルとしてもちいられている。このクシャーナのものは先端の三叉の下に斧をもつ形が特徴的である。

左手にもつ動物の生皮（獅子とも虎とも言われている）もまた，シヴァの特性ではなく，Demetrios (c. B. C. 200) 以降の諸王の貨幣に多くあらわれるヘラクレス立像の特徴をうけついでいる。ただしヘラクレス坐像はそれをもたない。なお，Vima シヴァAタイプの裸形，Kanishka 以後の OESHO タイプの棍棒もヘラクレス像と共通の特徴となっている。この様な共通性の多さは偶然とは言いえない。このいわゆるシヴァ像には，

像容の特徴から見て，それに先行するギリシャ人諸王の貨幣の神像のインド化と見られる要素が多い。

Vima シヴァBタイプの特徴は神像とこぶ牛の組み合せで，これがシヴァとナンディン牛に比定されている。こぶ牛を即座にシヴァのシンボルたるナンディン牛とする比定がしばしばあるが，こぶ牛は象，馬，ひょう（？）とならんで，Seleucus にはじまり[21]，ギリシャ，サカ，パフラヴァを通じ早くから貨幣にあらわれる，ごく一般的なタイプである。象・馬などと同じあらわれ方をしながら，こぶ牛のみをシヴァ神格のシンボルと解釈することは妥当であるまい。ただ，こぶ牛のあらわれる Indo-Greek 貨幣は，一番古いもので Apolodotus (c. B. C. 150) のもので，すべてカローシュティー銘をもつもの，すわなち Gardner の言うセミ・ヘレニック・タイプ[22]に限られているということは注意すべきである。

Vima シヴァCタイプは三叉戟のみをあらわしている。三叉戟がかならずしもシヴァをあらわすものでないことはすでに述べた。Demetrios (c. B. C. 230—200) 貨幣にも同型の三叉戟のみの図があり，三叉戟ではないが "tripod lebels" と呼ばれる意味不明の，三本の棒をくみ合わせたシンボリックな図が Euthydemos II 以後数多くあらわれ[23]，三叉戟のプロトタイプを思わせるが確言はできない。

以上のように，後世，早くともグプタ期ごろ成立したヒンドゥーの図像形式からみれば，Vima 貨幣の神像はシヴァ神に比定されうるが，ギリシャ人勢力によってはじめられ，大体その後もその影響をうけつづけた貨幣鋳造の伝統から見ると，実はこれをシヴァに比定すべき積極的な特徴は見あたらない。カローシュティー銘の王のタイトルや，VimaシヴァB タイプの下衣，さらには mahiśvara の名にインド化の傾向が顕著に見られはするが，インド的であることがこの神像がインド神であることを意味せず，むしろポセイドン，ヘラクレスのインド化ととるべきであろう。インド的タイトル "mahiśvara" もここでは神名であるより，王の称号となっているにすぎない。

クシャーナ第二王朝の Kanishka, Huvishka, Vāsudeva 諸王の貨幣にギリシャ文字 "OESHO" 銘をともなってあらわれる神像は，その像容スタイルが Vima 貨 mahiśvara 神像にやや似ていること以外には，三叉戟に共通があるのみである。Vima B タイプのこぶ牛すら Vāsudeva 貨にしかあらわれない。三叉戟の貨幣の表面に王像があるのも，Vima と Vāsudeva に共通である点，注意をはらうべきであろう。

OESHO 銘は，はじめ Gardner が "OKRO" と読み，シヴァの異名のひとつ skt.

"ugra" の訛音ととった[24]が，論ずるまでもなくこれは "OESHO" である。Rosenfield はこれをシヴァの異名の pkt. "haveśa", skt. "bhaveśa" ととり，Maricq の pkt. "visha", skt. vṛisha" 説を否定している[25]。音韻上の問題に言及する準備はないが，skt. "īśvara" の転訛という可能性はないであろうか。

いずれにせよ OESHO が即座にシヴァを指すことにはなりえない。碑文でシヴァの名が出て来るのは，タキシラ・シルカップ出土のカローシュティー・ブラーフミーの両文字の "sivarachitasa" （シヴァラクシタの）銘をもつ銅シールである[26]。このシールの像は，左手に三叉戟，右手に棍棒をもっている。"sivarachita" は skt. "śivarakshita" で，「シヴァに依って護られたる」を意味する個人名で，シヴァの名でシヴァ神を意識したらしい可能性のみとめられる例ではあるが，シルカップ第二層出土ゆえ，A. D. 25 をさかのぼらないという以上の年代は不明であるし，それが土着の人名と決定することもできない。

像が手にもつものは，付表にしめしたとおり，三叉戟以外には特に神格を特徴づけるものはない。もちもので四王の貨幣に共通のものは，前記のとおり三叉戟のみ，三王共通は Vima 以外の水つぼ・OESHO 銘・四臂像，二王共通は Kanishka-Huvishka グループの太鼓（またはヴァジュラ），角のある動物，人頭（またはひょうたん），および Vima Vāsudeva のこぶ牛， Huvishka-Vāsudeva の三面像がある。各個に特有なものは Vima の生皮，Huvishka の車輪と棍棒，Vāsudeva の王冠（またはひも），蓮華，肩の炎[27]，および三面二臂像である。

こうして見ると，OESHO 神固有の属性は OESHO 名，三叉戟，水がめしかない。車輪と棍棒は武器であるし，太鼓はのちのシヴァの属性，もしヴァジュラならこれも武器である。人頭と角獣は意味不明，王冠は写真を検してみても何かわかりにくい。蓮華はインド化を示し，あるいはインド的には神性をあらわすかもしれない。通じて見たところ，もちものにあらわれる特性は，力をあらわすらしい三叉戟をもふくめ，あらあらしく闘争的なものである。なお Huvishka に OESHO-NANA 銘連像と，OESHO-OMMO 銘連像のタイプ[28]がある。NANA はメソポタミア起源の女神 NANAIA, OMMO はシヴァの妃 Umā に比定されているが，OMMO-Umā 説は OESHO-Śiva 説に疑義があるかぎり，即座にはうけいれがたい。むしろギリシャ・ペルシャに重んぜられる NANAIA との連像が，OESHO 神のもつ非シヴァ的要素を暗示しはしないか。

モヘンジョダロー出土のシールに，シヴァ神像のプロトタイプとされるものがある[29]。

これは左下方が欠けた方型のもので，中央に結跏三面の神像が牛の角をかぶってすわり，その周囲に象・虎・さい・水牛を配したものである。シヴァのシンボルである牛の角をかぶっていること，および動物にかこまれているのはシヴァの多くの属性のひとつたる獣主（Paśupati）を思わせること，の理由からシヴァのプロトタイプと言われている。

別にハラッパー出土，灰色の石灰岩のトルソー小像がある。原型では踊る三面四臂の男性像で，そのポーズは舞踊神たるシヴァ（Natarāja）の祖型と言われている[30]。

この二例の比定を仮にうけいれても，それはあくまで Paśupati および Natarāja の祖型ということであり，だからと言って直ちに「シヴァの祖型」とするには疑問がある。ことに Paśupati の場合，牛の角の冠と，けものにとりかこまれていること，の二点だけから，Paśupati-Śiva と断定するほどの根拠は見出だせない。動物神が存在したことは認められるし，その動物神が Paśupati の祖型であったかもしれない。しかしその非アーリヤの原 Paśupati は，ヴェーダの Rudra や Agni を起源とするアーリヤ神とは，もともと無関係のものであったはずである。しかも図像的には後代の Paśupati 像との類似はほとんどなく，ただ「けものの主」との理念に相通ずるものがあるにとどまる。

シヴァの起源については，更に論ぜられねばならぬ多くの問題がある。シヴァがかならずしもアーリヤ起源でないことは一般に認められている[31]。そのアーリヤ的起源は多く暴虐の神 Rudra にもとめられる。ヴェーダにはシヴァの名はあらわれず，所謂シヴァ神がシヴァの名で呼ばれはじめるのは，古ウパニシャッド第二期である。今日知られるシヴァ神格の概念は，グプタ期に完成したプラーナ類で説かれるものであり，それ以前はプラーナ類に入って「シヴァ」という包括的な神格に吸収される以前の，多くの要素的な神格が各個無関係に，ときにはそのうちのいくつかが結合して，存在していたものであろう。この要素的神格には，獣主神，破壊神，舞踊神，創造神，苦行神，生殖崇拝乃至性器崇拝その他があり，さらには神々の主宰神としての mahādeva, īśvara, maheśvara などがあるが，これらの起源については時代も文化背景も決して一定していない。

前述のように，アーリヤには像崇拝の観念がうすい。インダス文明を別として，もっとも早いシヴァ像とされるクシャーン貨幣の像は，インド神格の図像化であるよりも，Indo-Greeks にはじまる貨幣神像の特徴をより強く継承している。この二点を考えれば，この像がインド起源のシヴァ神乃至シヴァ的神格とは言いえない。ながくインド人が神像をもたなかったにもかかわらず，何の準備段階もなしに，インド神のひとつが突如貨幣にあらわれるということが，たやすくありうるであろうか。

似たようなケースが仏像の出現に見られる。仏像の出現が仏教徒にショックを与えた

であろうことは，クシャーナ第一期以後のおびただしい作品や，仏典にみられる仏像への意識の強さから[32]充分うかがい知れる。貨幣の仏像は，仏教徒のあいだに仏像が定着した以後のものであって，仏像の出現と変遷に対しては貨幣像は何の役割も果たしていない。これに反して，この貨幣シヴァ像は貨幣以外のシヴァ像の作例からは時代的にも図像的にも様式的にも隔絶しているし，文献資料にも関連するものがない。貨幣にあらわれるそのあらわれ方は，仏像の場合とパターンがまったくちがい，ギリシャ・ペルシャの神々のあらわれ方と軌を一にしている。そして，貨幣にあらわれながら，それと平行する彫像はなく，またその後その系統をうけるものが消えてしまう点でも貨幣シヴァ像はギリシャ・ペルシャ神像に類似している。

検しうる貨幣は出土地がわからないので，この mahiśvara-OESHO 神（mahiśvara と OESHO が同一神格を指すとは限らないが）信仰の地域的ひろがりはわからないが，少なくともインダス以東に遠くは及んでいない。西側へのひろがりについては，この神への信仰はクシャーナ版図の西方でさかえ，西紀三世紀になるとヒンドゥ・クシュの北にも OESHO タイプはひろがり，Maues 貨幣の三叉戟と棍棒をもつ像が OESHO のプロトタイプであるとの指摘[33]がある。しかしこの指摘から確証は読みとれない。ここに，出土地不明，像容も特異な，Saozma Kala 出土，Mazar-i-sharif 博物館蔵の三面の粗石像がある。中央の像は半裸，左肘に衣端をかけ，右手に動物（獅子？）の生皮をもつ。左右の面はあごひげをはやし，向かって左の像は三叉戟をもっている。この像はヘラクレスと仏の属性をもつシヴァと言われるが[34]，この比定には疑問が多い。三叉戟と左肘の衣端にそれぞれシヴァと仏の特徴を見ている訳であるが，双方とも西方的な感じが強い。三叉戟も動物の生皮もヘラクレスやポセイドンの属性であり，敢えてシヴァに比定すべき理由にはならない。しかし三面・三叉戟・生皮は OESHO および mahiśvara 像と共通であり，何らかの関係は考えられる。だが残念ながらこの像については不明なことが多すぎるし，像容も余りに孤立している。

さて，以上を要約しよう。貨幣のいわゆるシヴァ，または mahiśvara-OESHO 像は，後代のヒンドゥーの図像形式にもとづけばシヴァと言いうるものではあるが，後代の図像学にもとづくよりは，この貨幣像に直接先行するギリシャ・サカ・パフラヴァの貨幣像にあらわれる類似点をもとめて，その祖型をさぐるほうがより自然である。その検討の結果は次の諸項に要約されよう。

(1) 銘文およびもちものは，かならずしもシヴァにのみ特徴的なものではない。もち

ものはヘラクレスとポセイドンに類似があり，像容も前代のギリシャ神あるいは，ペルシャ神像の系譜に属する。

(2) 類似の像は貨幣にしか見られず，これとつながる彫像の存在はほとんど知られていない。

(3) 貨幣像相互のあいだで像容が一定しない。

(4) 分布の範囲はガンダーラ周辺から以西でインド内部にはない。

これら諸点から考えて，この mahiśvara-OESHO は，のちインド神シヴァのひとつの要素として組みこまれはしたが，クシャーナ貨幣上にあらわれた時点ではシヴァとは関係のない独立の神格であったと言いうる。更には

(5) アーリヤンは偶像崇拝の伝統をもたなかった。

(6) インダス文明以来，崇拝対象と思われる非アーリヤ的土偶の存在が知られ，マウリヤ，シュンガの神像彫刻も非アーリヤ神のみである。

の二点を考えあわせると，mahiśvara-OESHO 神はインダス流域にあった非アーリヤン土俗神のクシャーナ化されたものと考えることも可能である。しかし一方では，Vāsudeva 以降の OESHO 像とその後のヒンドゥーのシヴァ像とに可成りの類似があることも事実である。

Vāsudeva 期にクシャーナ文化が特にインド化したことは一般に言われている。Vāsudeva なる名前自体が，前代までのクシャーナ諸王とちがって純インド式であり，その版図もインド側に縮小したとみとめられている。このインド化いちじるしい Vāsudeva クシャーナ期に，西方の造像伝統と土着神の観念とをうけてはじまった OESHO 神のインド化がおこなわれて，それがシヴァ神に融合されて行ったことは充分考えられるところである。支配力の弱まった Vāsudeva 期のクシャーナにとっては，文化面におけるインド化もまた避けえないところであったにちがいない。

貨幣の mahiśvara-OESHO 像が，上述のように，即座にシヴァとすることは否定される。しかし，シヴァ自身の起源，発達の様相が不明であっては問題は解決されない。像崇拝をもたないアーリヤンのあいだで育ったシヴァ神のアーリヤ的側面の変遷が，ヴェーダ以降プラーナ類にいたるまでの文献資料をとおして究明されねばなるまい。貨幣シヴァ神に見られる西方的要素や土着的要素と，文献資料中のアーリヤ的要素とがからみあって，後世の複雑なヒンドゥ・シヴァに集約されて行く過程の解明は，近来インド学全般に亘って重視されている“Sanskritization”の問題に対してあらたな視点を提出するものであろう。

（筆者は龍谷大学文学部講師）

註

ASIR *Archaeological Survey of India (Annual Reports), Annual Reports of the Archaeological Survey of India.*

BMC *British Museum Catalogue of Coins.*

CII *Corpus Inscriptionum Indicarum.*

IMC *Indian Museum Catalogue.*

JRAS *Journal of the Royal Asiatic Society.*

PMC *Panjab Museum Catalogue of Coins*

1) Gardner : BMC, p. 130 (No. 150), p. 133 (No. 36), p. 175 (No. 2) ; Whitehead : PMC, p. 193 (No. 113) ; Smith : IMC, p. 174 (No. 66) ; Marshall : *Taxila*, p. 821 (No. 261) (?)
なお, PMC p. 181 (No. 29) はうたがわしい。その他にもと Buddha と比定されるものはあるが信じがたい。

2) BMC, pp. lxiv-lxvii ; Rosenfield : Dynastic Arts of Kushans, pp. 72 f.

3) ギリシャ文字 "OHÞO" とあり, Gardner はこれを "OKRO" と読むが誤りである。

4) Rosenfield は diadem と言い (ibid. p. 167), その他ひもと言われもするが判定困難である。

5) Rosenfield はこのタイプと Akhun-Dheṛī 出土のシヴァ神像との類似を指摘している。 cf. Trimurti from Akhun-Dheṛī (chārsadda) ; Peshawar Museum ASIR, 1913-14, pl. xxii (未見).

6) 高田修『仏像の起源』p. 64 参照。

7) 高田修「マウリヤ時代の神像彫刻」(『仏教美術史論考』pp. 120-137) 参照。

8) Deogaṛhi, Akkun-Dheṛī などが初期の彫像とされる。なおリンガをともなった Gudimallam のシヴァを西紀前とする比定 (V. S. Agrawala : Śiva Mahādeva, The Great God, pp. 42-5, 51, pl. 2) は問題にならない。

9) (1) Konow : CII, No. xx.
(2) ibid., No. xxvi.
(3) Konow : JRAS 1932, pp. 949 f.
(4) Konow : CII, No. xxvii.
(5) ibid., No. xxix.

10) Raychaudhuri は「184」と読む。

11) 高田修『仏像の起源』pp. 307-9 の表参照。

12) 同上 p. 82 参照。なお「Kanishka 1年」製作者名と言われる「Agiśala」を含む銘文で有名なシャージーキーデリー出土の仏像をもつ舎利容器は, 古来問題の多い遺品で, 年数の読み

方にも疑問がある。cf. B. N. Mukharjee Shā-jī-kī Ḍherī Casket Inscription, *British Museum Quarterly* 28, pp. 39-46.

13) Peshawal Museum 蔵 No. 1773, Shahri Bahlol 出土 ; Ingolt : Gandharan Art in Pakistan, No. 341. これは四臂である。

14) PMC, p. 151, Nos. 42 f., pl. xv. 43.

15) BMC, p. 12, pl. V-1, 2 ; PMC, p. 18.

16) BMC, p. 70, Nos. 14-16, pl. XVII-1.

17) BMC, p. 89 ; PMC, (18) type, pp. 122 f.

18) BMC, p. 7, No. 14

19) BMC, p. 71, Nos. 18, 19, pl. XVII-4 ; PMC, type (K), p. 101 ; type (L), p. 100.

20) BMC, p. 127, pl. XXV-12-14. 裏が Vima シヴァBタイプ。

21) cf. W. W. Tarn : Greeks in Bactria and India, pp. 213, 402.

22) BMC, p. lviii.

23) 三叉戟図 BMC, p. 7, No. 14 ; IMC, p. 9, type (4). Tripod lebels. たとえば BMC, pls. III-5, -6, IX-10, X-5, -7, -8, -9, XI-3, XIV-7 など他にも多い。

24) BMC, p. lxv.

25) Rosenfield : ibid. p. 93

26) Marshall : Taxila, p. 681, pl. 208, No. 56.

27) Rosenfield, ibid. p. 107 王像にもある。

28) ibid., p. 94.

29) Marshall : Mohenjo-Daro and Indus Civilization, vol. 1, pp. 52-8.

30) Rawland : The Art and Architecture of India, p. 15.

31) T. A. G. Rao : Elements of Hindu Iconography, vol. II-1, pp. 39-71.

32) 拙稿「観仏三昧と三十二相」(『仏教学研究』24号参照)。

33) Rosenfield : ibid., pp. 94, 125.

34) Fischer : *Archaeologischer Anzeiger*, 72, pp. 416-435(未見) ; Rosenfield : ibid. p. 94 ; Tucci: Syncretistic Image of Mazar-i-Sharif, *East and West*, 18 (Nos. 3-4), pp. 273-4.